

まいど！ざいむ局です！



関西元気企業

～時代の変化に対応せよ！～

ご紹介する元気企業は、合成樹脂から長い製品を作る分野で国内トップクラスの技術を持つ「㈱カツロン」です。

創業時の棒状のチョコレート作りという長い製品を作る技術をベースに、今では、合成樹脂やプラスチックを原料とした扉のクッション材や階段の手すりカバー・滑り止めなど、5000種類を超える商品を開発している。

今回は、市場のニーズに応える製品を手掛けている合成樹脂加工メーカーの石川社長に迫ります。

企業情報

名称 株式会社 カツロン
所在地 大阪府東大阪市下小阪3丁目8番6号
設立 昭和24年6月 代表者 石川 明一
従業員 102名
資本金 46百万円
H P <http://www.katsulon.co.jp/>

● 創業時はどのような事業を行っていたのですか。

当社の創業は、昭和24年です。祖父が創業し、父が2代目で、私で3代目になります。創業当時は、戦後統制下の時代であり、砂糖がなかなか入手できなかったようで、「サッカリン」(人口甘味料)を使用してチョコレートを製造していたようです。「押出成形機」で棒状のチョコレートを作っていたようで、ちょうどシガレット型の細長いチョコレートをイメージしてもらおうとわかりやすいのではないかと思います。

この当時は、チョコレート自体が珍しかったので、結構売れていたと聞いています。そこそ儲かっていたんじゃないでしょうか。

ところが、砂糖が普及し始めると、サッカリンを使用したチョコレートは売れなくなってきたようです。所詮、サッカリンは、砂糖の代替品でしかなく、消費者が本物のチョコレートへシフトしていくのは当然のことだったんでしょうね。



㈱カツロン 代表取締役
石川 明一 氏



押出成形ライン

● サッカリンのチョコレート製造は、順調だったのですか。

砂糖が出回り始めた途端、チョコレートを製造する企業が一気に増えたそうです。当社は、サッカリンのチョコレートが売れていた分、参入に出遅れたんでしょうね。祖父は今から参入しても勝ち目がないと判断したそうです。

チョコレートの製造を諦めた祖父は、今後の事業展開について非常に悩んだと聞いています。

その時に目をつけたのが「合成樹脂、プラスチック」だったんです。手始めにチョコレート製造で培った押し出し技術で当時流行していたフラフープの製造に乗り出したんです。

チョコレートを押し出していたように、プラスチックを押し出せば

できるという確信があったようです。祖父も「これでいける！」と思ったのではないのでしょうか。

● フラフーフは売れましたか。

いや～散々だったようですよ。

開発に成功した時には、既にフラフーフのブームは去っていたようです。いつの時代もブームというのは、長続きしないものです。

● フラフーフの次に開発されたものは。

フラフーフが散々な結果に終わり、次はホースの開発に着手したそうです。ホースといっても、フラフーフを作るのと同じ原理(製法)で製造した、ごく一般的な家庭用の水撒きホースです。こうしたものは、爆発的な需要があるわけでもないので、食べるために細々とやっていたようです。祖父から「ホースの製造・販売では、ご飯は食べられるが、おかずは食べられなかった」というようなことを、聞かされたような記憶があります。

● 現在はどのようなものを作っているのですか。

バスや電車の扉パッキン、遮断機、点字ブロック、床暖房設備のお湯を通すパイプ、自動車の窓枠など多品種で何でも作っています。営業活動も積極的に行って、当社の製品を広めています。このような地道な営業努力が功を奏し、トヨタのプリウスの窓枠に当社の製品が使われるようになったんです。

当社のモノづくり精神は、「断らずにとにかくやってみる」です。受注があったものはどんなに難しいものでもまずはチャレンジしてみます。その精神が当社の多品種生産に繋がっているのです。製造現場で何が作られているかは担当者に聞かなければ分からないくらいなんですよ。(笑)



ウェーブ手すり



遮断機のポール



点字ブロック

● 苦労されたお話があればお聞かせください。

我々にとって、製品の形を決める金型は「命」といっても過言ではありません。この金型の出来、不出来が、製品の品質にまで影響するんです。非常に手間のかかる複雑な作業であり、効率を優先させる大手企業では、金型の製造は行わないんです。我々が、金型の製造に成功した途端に手のひらを返し、金型ごと引上げ、自分のところの下請けに安く製造させるんですよ。当社でも何度か経験しました。特に、先代(父)の時代には、大手企業から金型を引き上げられ、悔しい思いをしたことが多かったようです。

こうした中、押出成形と射出成形を融合した3次元押出成形を確立し(日米製法特許取得)駐車場緑化プレート「ターフパーキング」を上市し、今年手すりの表面が波打つような世界初の4次元成形を確立し、ウェーブ手すりを商品化しました。

● 社名の由来は

当時は、社名に女性の名前を使用すると繁盛すると言われていたので、私の曾祖母の名前「カツエ」にあやかって付けたと聞いています。ホースに「カツロンホース」と名付けて販売したこともあって、社名自体も「カツロ

ン」としたようです。船の名前の付け方に良く似ているんですよ。ちなみに、チョコレートを製造していた時の社名は、「日之出食品」と言っていました。

● 社長の夢は

私の夢は異形押出の分野で日本一の企業になることです。これは単に売上規模で日本一を目指すのではなく、顧客が樹脂素材製品を開発する時に、「迷わず当社に発注してくれる」ということが、私の目指す日本一なのです。

顧客から選ばれる企業になれば、働く社員は自分の会社を誇りに思ってくれるはずです。社員一人一人がカツロンという会社を誇りに思ってくれば、これほど嬉しいことはないですね。そのためにも日々、顧客のニーズを捉えた新たな製品開発にチャレンジしていきたいです。現在は創業後 62 年ですが、まずは 100 年企業を目指します！！



3次元押出成形ライン

取材後記

「種類が多すぎて、工場内で何が作られているのか、わからないこともあるんですよ」と笑顔で語ってくれた石川社長。

仕事がある程度見えるようになると、何か新しいアイデアが生まれても経験が逆効果となり、「それは無理」と思い込んでしまうことが少なくない。

しかし、本当に無理なのだろうか。「とにかくやってみてはどうだろうか。新商品の開発に繋がるかも知れないじゃないか。」この会社には、こうした風土がしっかりと根付いていた。

だから、誰もが迷いなく挑戦し、これまで 5,000 種類もの商品を生み出したのだ。

石川社長は、「自分で考え、自分で作り、自分で売る」という哲学を武器に独自の技術と営業力を育て、大企業への依存を拒んだ。

その裏には、大企業に金型を引き上げられ、部屋の片隅で人知れず悔し涙を流していた父親の後ろ姿があったと言う。

様々な教訓は、祖父から父へ、そして今、息子に受け継がれている。

掲載している情報は、平成24年3月時点のものです。